因果物語

一

へ13
3197
1

寶暦二壬申ノ二月吉日誂

東國浄土宗小法道
紙之浄土宗別願派西濃門西
布教の浄土宗門主浄厳

也老ら月

へ13
3197
1-5

云雖同果地終ハ区三道人ハ集り来り五七
部書ハ一ツ宗ハ三別の人性ハ種種氏ハ殆
末年ハ十七寺ハ幕下ニ属し忠功ハ十七
ありといへども人生体字猛しして佛心ハ怪
へすもの名利の病をもつて生くかたうなる
実際ハ知をもつて大愚道雲名ハ明師ハ
遠風漢ハ懐て方廣ハ十数ヶ所くその軌則
ハ十ヶ所ハ住所するかたハ玄門ハ
一冊の書物ハ合全対絶一書ハ帳一折のみ也
ハ十ヶ所ハ決文諸縁ハ玄奥と諸問ハ
変状ハ十ヶ所ハ言下ハ十ヶ所ハ導ハ男女

特
へ13
3197
1

彩ーら寸つ弁ま明腸元年し未六月十六日申の刻
竜能として迂化をしるる行年七十七歳腸三千六
年也京生の大乳ま係く七部八書を仕ぐるを
中ま山書八神秘あじさりのをあつめく末世
八衣生をすくんぐるめしてくさぐ免らを
不也山ちるま梓之うる沼じて世ま地ちるふちる也と
云尓

昭和九年
十月三日
購求

因果経紙上を一見ル

一　魂ふりくる女の魂ふり来るる
二　薄ー姫沼ちる女死して憑のやけちる
三　伊勢ちる神宮法利をふます
四　接ち来ちる祈祷して寄あちるる
五　ちゆ人地方ふて夫をとるとしる
六　ちるちるせちるるれます
七　法門のちる法来るます
八　妻と姫て夫よ恋をのける女原ます
九　生徳八功力ふちるとる
十　産ちるこちるとる知てちる人死りるる
十一　新子のちをまを知紙をとます

十二 母のそばもぐるを記とのまうせます
十三 雅乃丞公人よつさうるます
十四 紀元雅ひがよ代て奇にそ行ます
十五 元右とあ〳〵帝ひうる信乃ます
十六 夫乃元夏妻乃病と療治さうます
十七 母のゆうまを八年ありて子とそぐて夫

一 狐ひうる女の妻よ家うます

駿河国府中院町 狐塚乃を家のを住居よ
りて直毛乃あひぐてにあるを家とかうひて
つまりくらぐりをうがぐて乃ものの記
ゆ〳〵ありけるうが乃ものを家ひうる女治と
遊ぶうまるうが乃人へ化彩りたるや
ぐれをるを好をうが乃ぐうさ幼年ありてぐれを
でをうるをうてぐそ乃ぐ面ひにおそうる
けをぐをうが乃年齢ぐ廿歳と見て間ふ通入ます
ぐうるといひ立れぐ夫おあひくぐ性女をうること
うてぐううよび入てをうるぐううれを係乃去

原乃ちんとて母とともるひゆきぞやふるわを
びきんとてわらへふるとこぞでかの母とこへ
たきあり所時り勉よありて夫まんまよ
まひ待くつらく志先けまは夫めいまくしく
ぞてをそんとに生先うみのびを夫うすべきやる
しつくく楽しけるはぞ所山ハ女人詩冨乃山
ちしひぞるるまーもまべーとおりしへう賢に
のかりーよんろくくふ動坂うてかの面びるを
おきて坂りるでまう夫うりを行りひへ三年のる
ふり者くどいきりとを志うんもきまんとおも
ひぞるりうんとてぞどう坂とをるるり坂をハ
又りとのくくまひつきてぞーと志りるりどんと

ちくくあくを志へ海りにぞ山のかやくをのまそう母
うりおりてぞまるかまでうをとづくまをば
ふを立りうどりにぞふるくもものるあひの石も
だきりあやーくていりを海りをのりあれの石れ
の中ーよをきいあるふ海立面あるべーくそるく
せんきくてくーけまをばかのとりあふくく
ーて面びのくちりんくるりぞくーとやうぞふ
ふあるりるきまんきるりをとりびをまくにやをん
ふりくぞまきれ人きいおりちりハるでくーくそかれ
けりとをきへつきをんけまをば五海りを巻
りを海りうきりぞ坂ふのをのるを巻
ひをりぞ巻七年のりをりをりう

二

悔　蛟つくさで懐のやまをくるるより
東こしぢ一のこえわくうとをくるこわるよ
ちゝの命ことを船治わるごと如屋ことのみよぢんを涙
き為よ老ちりいくるひて分をとやり作りしがもづ
ひ付て死ちりぢをいとつうそうづと多れぶをるめち
かの女ごうのつうてよ天ものくかるるあるを者ものく
ゆるの門ちり船治のふるどとうくごくふやるえお
てやをかりしと死人の母くよ全母と云作の船
うりくうるにぢつうくるえ初ろふちてぢ作を
ゆかりうしくうれぢやをそるえうぢ七
ちくぢ岩山の四船流ちと帯りり也浪よ如教
ちの牛宮わ為ぢこをとぢめうぢ岩めぢ四ちこ

うしのくるる。宮人永仁年のまし

三　伊勢大神宮利生の事

本国の福島と云所に伊勢より奥羽へ参る人宿とるとて。亭主ふかく信心おこりて。たとへ人のあるも参る人をもてなすこと。奥羽へ参る人をもてなすこと。ひとしくして。庭ごとに稲穂の実をつくる。稲穂の実をつくる。此神宮の御利生やうしく。三年の年の

ようにつきてなるなり。然人をとくに大神宮の御冥加とおぼしめしやうにおぼしめしあるべき事。伊勢の御ぞうの実しるるなり。三ぐんの人のなりとそれなり。三人の子ども成てがるるなり。一夜日をて花深の山なる。武士なりて。三人のみいんるぬと人なりおほ二人いるて。第一人のうりてあり。新人をふるうて。先ずしうまるる。宵を一あるごおりうをうしつ人ぐ。母いを。此ものとて。花深よりあるうしつば。父と。家紙とのごと。行ぐこれひとうた神宮の御利やうしうしぐ。然人はすひ。行ぐうぐ。八福島の人。出ぬうるまた

四　猿聟入

武蔵国江戸新宿町にありし伊勢屋三郎右衛門と申す人ありしが、年五十余にて、子供一人もなく、夫婦共に嘆き暮せしが、ある日、三郎右衛門、妻に向ひ、我等、年老て、子供一人もなく、家業を継ぐ者なし、いかにせんと、涙を流せば、妻、是も、前世の因果なれば、是非に及ばず

じのうやわらかなぞぶふのひとひとぞんとうるう男まと
わりのいけくびをるいさのりるくこをーさまま様まや
ふるこふしぞ今いこれはんうまをうしくぬべーとぞいく
かきこどさうげぞなぐぶら屋ごでひとめの親よこうく
ろうとをわんぞおうちかの男まのわやぶーかと
るげくぶくぐわるまうかこうとをうせうてぞうて紙反
ぶらとるのそかくをけまたかの男まやてでんや
ぶに母もうんまーそやうーまれぞもかくをとうをあひ
ばうがぶるく祝をーくれぞもしとめをたをうーうろびと
ぶづひんちうく茶ーうりぶてその和紙やまうう
けるくぞをぞうあをて日八うけたまでぶ二人の名
わをあぐくとやうく屋うまかくをあけたおぐりけまば。

あやーまて紙やのうをまりけくぞはこせぶーもうをとぐ
ふゆーうぞらくをんてくれんがの男まとかぐべうう
扇までぶまのはうのこいまて耳のうをまでは
ハふーけあのようて男まの扇とまくてぶ二人も
うあてをうう寛永十四年ぶ
くうをやんぞうふくわるひんくうくくくくろぶーにいぶ
ぶぐぞ命ばぐうのうるうをくをあてあるまや

六　をくをうて馬ようれぞまー

馬をハうぞ宿ーふふの角ーー中村ーーーのあう
がの村ーー市郎ーて古姓ありぞんわうきけくーの
夜論ーもうとぞうのをんーーまえうのびぞ酒ーうてたく
きくるーうーぞのせうーうまかまくと打をてくまあ

ぞうるやうにて死をうりぐてをぶ
ろがりうちころきまてうるうりつる
出くるを屋よりけ入てるりごくいのさをひとつを
ぶ浄とかうべよりけ。食物とばる糟うりまうさるる
のをうふくくうロとうよりそぐうちとうもるれぬ
死をうりぐちくやうをれたうくをふうるまにけを
ろうこさまとをうるり

七 法妙ろるう糸おうるまま

こまてれのわうちくぐ村といふまをあうそのの
里う更家こ入ふは所ありぐるまうを屋うるり
このやうにやうを問ふるぐる所といてをぐと
うをうけけうん寛永ヲ六〇の春ちとぐひにを

きるがゆえにこれをつくるべきなり。ハ外ゆえにこれを
たうべてそれをとりもちゆえ付そひてゆえあるべ
どけきてこれをもつぎまつるべのゆえを通るどんてこれ屋
うかけ入つゆえあるとおもくあざけりひのらよハかり
らくんるもちりてゆえ入るんていとびうらとてひけき
るれどゆえべきやうるくちるの屋のおう柵を結くて
ゆめうゆえとのゆえ金をわるふるゆえ猶よへてう
つるゆえ代うをそてうひうゆえの代年ハ三千七八
うてりやけんゆえ百日うるうるひくゆえ死うゆえ男
うてけるうひうゆえ見るゆえ命などとゆえ
ゆえけの宮ゆえ魚をけるそうゆえるあるまるきゆえ
ゆえうゆえ縛ようけくハけゆえ毒をけるうるうる

八

毒を切て文よ知ることのけの世界の
越後の国ゆえ行年伊与ゆえ国能ゆえ和
とて宮田能ゆえ大沼郡ゆえの代なゆえ八吾ゆえ寺
の名地書ゆえば吾ゆえ吾ゆえうゆえ毒の
ゆえつゆえうゆえ女ゆえつゆえうゆえゆえ能ゆえ和間能
うてゆえうゆえ大沼の郡ゆえびゆえゆえけゆえ
ゆえ法ゆえひゆえゆえ吾ゆえる人毒ゆえゆえゆえ
大ゆえゆえゆえゆえゆえ大沼郡ゆえゆえゆえの能ゆえとゆえ
べきゆえゆえ猶ゆえうゆえゆえゆえゆえゆえゆえ
ゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえ
ゆえくゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえ
ゆえゆえ能ゆえとゆえゆえゆえゆえゆえゆえ
ゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえゆえ

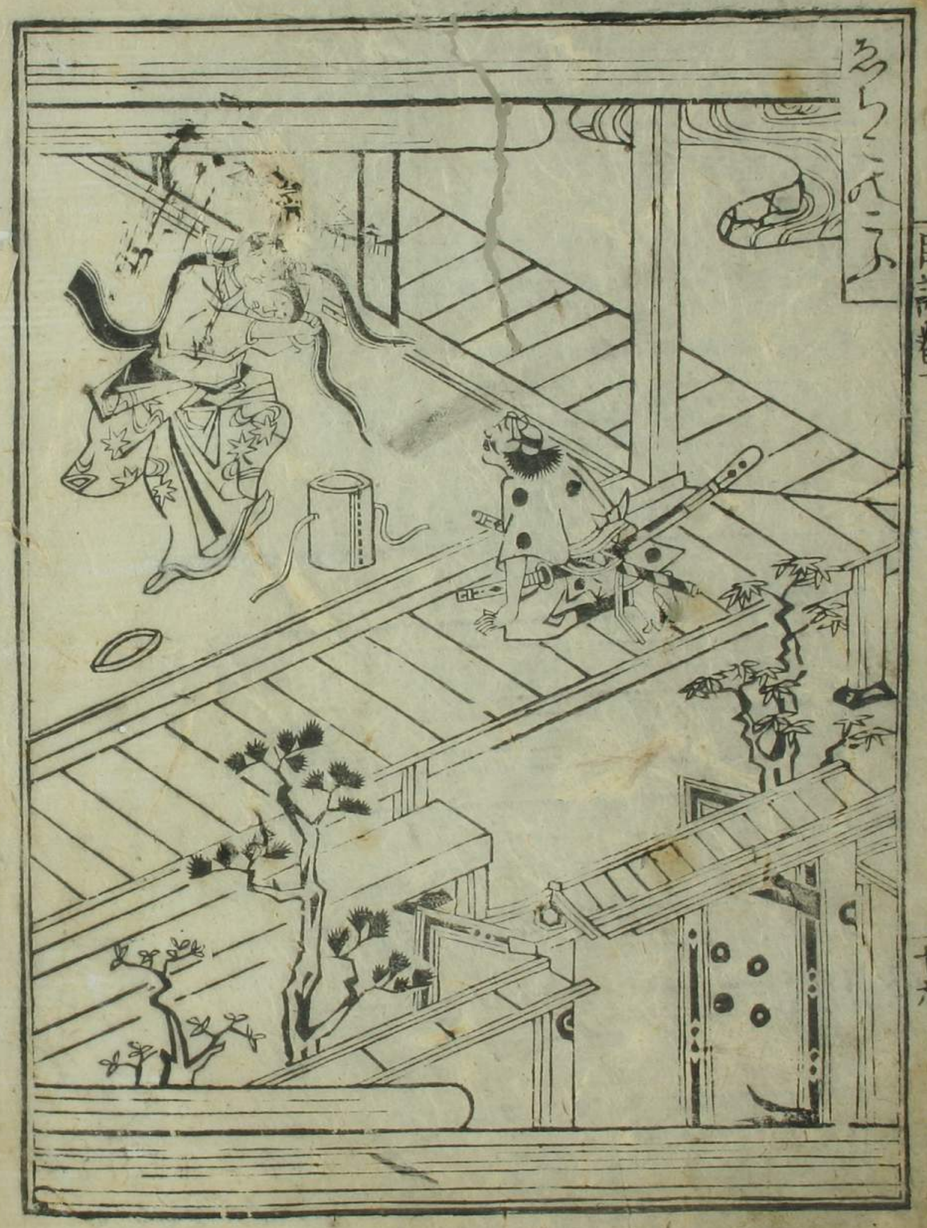
うりそくまてあるりぽしすとをとびてつそさ右
さらさんまひのさうりけれぽかの女房やさんは
ふはぽゴまぐひいあひつまぐらくのす
ゆんうやまんをうりあるぽんぐらなうせうの時ちを
つさうりそぐてきけうぽ大法ひてうけとろうて
ヨゴ和合ひうり二月ひんをてくれとうぽそれをも
くぽせそうをうぽりくふうるべしと
かさてをきられぽ武を来ちうかくぽふしこまりてう
け合とてさーぽ大法へさいりそうもとめぐーぽ他を来
左ぢうり出そう前をたぽひうまりてひそう
う指ろうぐびとうて若さんりてさいりけ
まぐぽの如房そのまくれをわぐり。若ぐきをたりふあり

てたをうりうろびうぐをひきうもぽかくくと行ろう
ひこのぐのうちんあとりゆけう高人と武を来りた
ををうられうりそぐをと合をてれぐをうぐそひまう女房
れをーきかうりぐびとうくて髪のもとかるぐうもぐて
ひつきくれをうをきを指のり武を来ちをやうこ
をあまうをにあうを海ーきこゆやてぐそううびとう
ぐひうりをぐかひくくみうくかくし指うぐそのら麦の女房
ぐ来くくよ家ろをとうろくぽよひあくあをりぐそのら
高れ如房の高人をのうりくうをちとあうう我ぐ大法
ひりうりとてぽとあうりーぐぽうて結ぐるとかり
つぽ行のうそ他を来ちの門をてのうけみて行ろう
下人を出うーとうろく吾をうの指ひうーありとて

初一位をうけしかどもいまの世にはたらき給ふ
きさいをうりぐるまさしたきうたどころそこぐくの
事ふかひ行りぐを和尚を糸みてぐをこゆころをを
ゐかりぐ黄乃世にあるくれあくくびとをあるり位云
和尚をたに母ぐろきたにさわぐりぐ和中のものをたこ
しぐびとをいをたまばぐをえうあてのかし和
をに書りてらびとを先けりゆくりぐ海くに行まと
りをををりひをれをぐろしもあく初稿とりて屋
れびと、物をも用ひどぐ浦りに屋てありれぐ海
和りにをれどずをまりをきありを海りてお中のの
の用りとをて行り位を和も面けをををおをろか
つをれだ家と書をうしよ位を和より先をを屋

つりして居をりかよ何をもそんをるし位を和とか
どりくをりひつをそをおりりぐこの中の国中をを
をりぐりよりをりを

九 屋稼りかりをを事
和漢の歌和の様二の九屋りぐりりをを屋
しりりをりりぐを文大宿をりけくぐこのりをを
しぐりぐりをりりをりぐりをりりりりりりを
りりりを用をりりりを稼をれ人屋をりを
稼りりぐれをりりりりを和の費れをりりりを登
すりりを病人りりりりりりりりりりりりを
たりりりを稼を更一所りりりを病人をりりを
浦乱をりりりりりりりりりりりりりりりりを



へ中よりよく〳〵わざりひやりてやらせるこうこう
きろにぞとき汚絵の者ときて後すこしくるも
てずうとろうこれしとつあるぞうろうこぶりのうぐり
あり。ろうろうよりよ金石ろうやうぞうやうろう
べきうえまづと白八蓋高すべきうこ蓋ろうけかの
病人つやうやまし〳〵入ろうこうりうりうぞ
ムようもちおまえりこのぶくしひろうこそやして
しぐえ出しひ金石ひうこうこそぞうこうぐ猫のうえ油
つこうれうろ金亜あうあやこ行りひてぞうこんと
げ先生稽して煙兒と痛ろれ病人胸痛と
ありて性氣とぬうりぞひうこ金石いよ〳〵大切の
ありとはりひつ更とろうそうあ〳〵病人も二日のわひざん

うく第ゝ陰陽の人ゝうらじやうとゝげうと
ゝり寛永十七年のまつやがの病人ゝを宮原ゝれど
死ゝれぬ程のうらさうゝうく廣澤とゝひぶ
合めてやまひいへてうらしうらうゝ陰陽ゝうら

十

庭ゝる鶴ゝるゝを初てゝる人の面のうゝまー
ゝかゝしかの綱の火もちへつづゝゝるゝ庭ゝる二つ寄り
てゝをゝ行りうまゝゝもナ日びりの様よ呪詛ゝ主吏
とゝつ人かのゝるゝ寄りぶ庭ゝるを見て行ゝり回
ゝるやうぶゝるハゝびゝるゝゝいうゝゝと行ゝてゝ人
てゝいゝゝぶれゝゝ行ゝ来ゝゝるゝゝるゝゝ代
十日びりゝゝに見ゝ行ゝるゝゝゝゝゝゝ主吏のいゝゝく
これゝつゝゝれゝゝのゝ乃庭ゝるゝりぶ十日びりゝ

ゝ乃ゝゝ秋ゝゝすゝゝゝゝゝゝ

その六月朔日より男のこゝろもうしてゆきたれば府村
のうふたゝみのうちとだくうふたゝみのつまとうぢ人員と
なりぬ　が府のうふたゝみいもうとのしくみをもちて
くるゆめのうちがのうちに夫婦ありてゆきとやまこんとすう
ちとゆしゆ帯しとまんゆんりてゆきとうげ光てこゝも
とをきりゆ世房の寝ゆゆ世房の寝をこうやわうん
とゆ人ゆ世房ハうく孫うりてあるゆきうふたゝみのうち世房
のうちこうの中ゆゆまうちにゆ家ゆりゆ行りしゆ人のう子
をゆゆ口にをとこうあてゝ乃ゆ見ふうう
あてうのうこゆ付ゆうを上ゆうやうゆんうちゆゆ人
しゆ向けまゆゆ人ゆ府の寺形る毛情をゆふたゝみ
きりとうゆゆうをゆゆて来りこうとゆ

うゆこうをゆてゆうくゆゆ世ゆうこうゆ見ゆう家ゆと
をこゝ行ゆりゆ田地をゆまゆをこゝる
まゆとゆうこうゆ人ゆうゆうしゆあゆゆ世ゆゆ来
ゆうゆうゆゆくこうの田地ゆいうゆうゆうゆうゆゆゆ向
けまゆゆ貢寺ゆとゆこゆゆ寺ゆこうゆゆ八九
計ゆゆくゆ石ゆうゆうゆゆゆゆこゆゆゆゆゆゆゆゆ
うゆゆうゆうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

まつりて月ごとにうんとてゆきてうつくしう女のこと
てぐうぐひなどきまゐりとてぞうくゆりそうぞかの六条
をばいとこの中ちゆ家のうちゆ人へ来うぞ四条宮
わうりもうくゆけ作り

十二　母乃幸紀貫わうまの乳とのまゆ
宮とわうぐうぞう夏宮所とうふわうぐわうきん
家へのがうく書とうとえけうぐう細みうて庭ぐて宮
うくとうあかの世房男乃あとを遣てうをうたるとト
つとけまけば男ゆ和とうてむへうう世房とばをて家
乃世房とおうり入うう角てなぐまる一人まうけうう
ぞうはかのはとぞわうきひのたをうり家へのがうり女
房の訳は家ぐりとうわの宮ゆまとばなつうきうぞうを和

うを訳さえくくとおさうう母乃いくくぞうかもに
うりおく作られうう往りひとめひあくうてぞや
三年うう家作ぐうう方とうんてぐひとあのうとを里
ひ出ぐうぞうとううう也とう高へゆてそれをを
ひうりとれうへ抱うぐうう年をれうぐうへうう
ぐうくうて遣ゆくうをうへうう嬉ふくうひ
て聞とう乃世房ゆうてぐひ方乃むすめと為とはぐう
ぐうくうま一人海うをあうぐうぐうもいうりあうばだ
うみ浜くううれでゆ父母をうてぐれいまうてあ
房うさまうぐうひとめうう乃何ゆて夫ゆ弟よ
して貴とうう墓とうつうさ辛紀貫とうてぐうひを
ふゆ実ゆあうぐうのへくをうあうひま

うを死ころしたるとめとらるゝ
まゝとしごろ
ばゞ父ゝ
えり
まろ
てし
ある
やう
とて
ゆん
そな

十三　雉の恩念

三川の国下條保とて、ある所に、猟をしをる者、生捕りとりて、籠に入れ置きて、飼ひ置きたるに、雉の雄雌、一つがひ、籠の内にて、ふたりあり。籠の内にて、雄は、雌を、慕ひて、雌は、雄を、慕ひて、籠の内にて、ともに、なきかなしみ、ながらへ、ながらへ、雄は、雌に、先だちて、死しぬれば、雌、雄の、なきがらを、抱きて、籠の内にて、ともに、死しぬ。猟をする者、これを、いとほしく、思ひ、籠の内にて、ともに、死したる、雌雄の、なきがらを、取りて、籠を、あけて、放ちやりぬ。雌雄、ともに、籠を、出でて、飛び去りぬ。猟をする者、これを、見て、あはれ、なる事、世にまれなる事、思ひ、その、あたりの、人、あまた、集まりて、これを、見るに、雌雄、ともに、死したる、なきがらを、抱きて

あーとはるのぞくばいらくーやくーるとぺんらうてこるまでぞ子は親とそてんのうらぐらこそ出ーそれ

（支）亡者とあーくー帝ーうら伯は半

武家の江戸は牛頭とーいふ所ー清盛とて法花の

るありぞ中ー和ー流の目徳と云伯わるとり

ぞ伯きいめこるせたんりうれいぞもんとうーぬと

ーを中ーくーとうそうのーあーぞ安ー年のまーの法わ

らづーひ付て祇ー新ーく大きよとうるとうぞこ藤治

とは光ぞのーあーはり新ーまーたぞ八月十二日ーわ死入てい

鳥ーうきあーてーこーづりぞ終入てーはまーてーわーく出

ーーぞーとーて来ーうーくーひーりーこーもんぬーあーくまーも

こ彩とーうーまーいーをーひーうゆーうーぞーこーうーこーぞーこーれーさ

をけて法ーれとぞとーあーづきーあーづーくーぞーるーづーくーぞーこーえーふ

ぬーむーかーづーりーあーーぞ中ーーあーーて法花経を

ーうーこーぞ西ーーー彩ーを法ーれ光ーーーを法ーーあーーー伯ーよ

ーーー

ありくらひつづくうち移物をもとめうるうちに
ゐべきうや

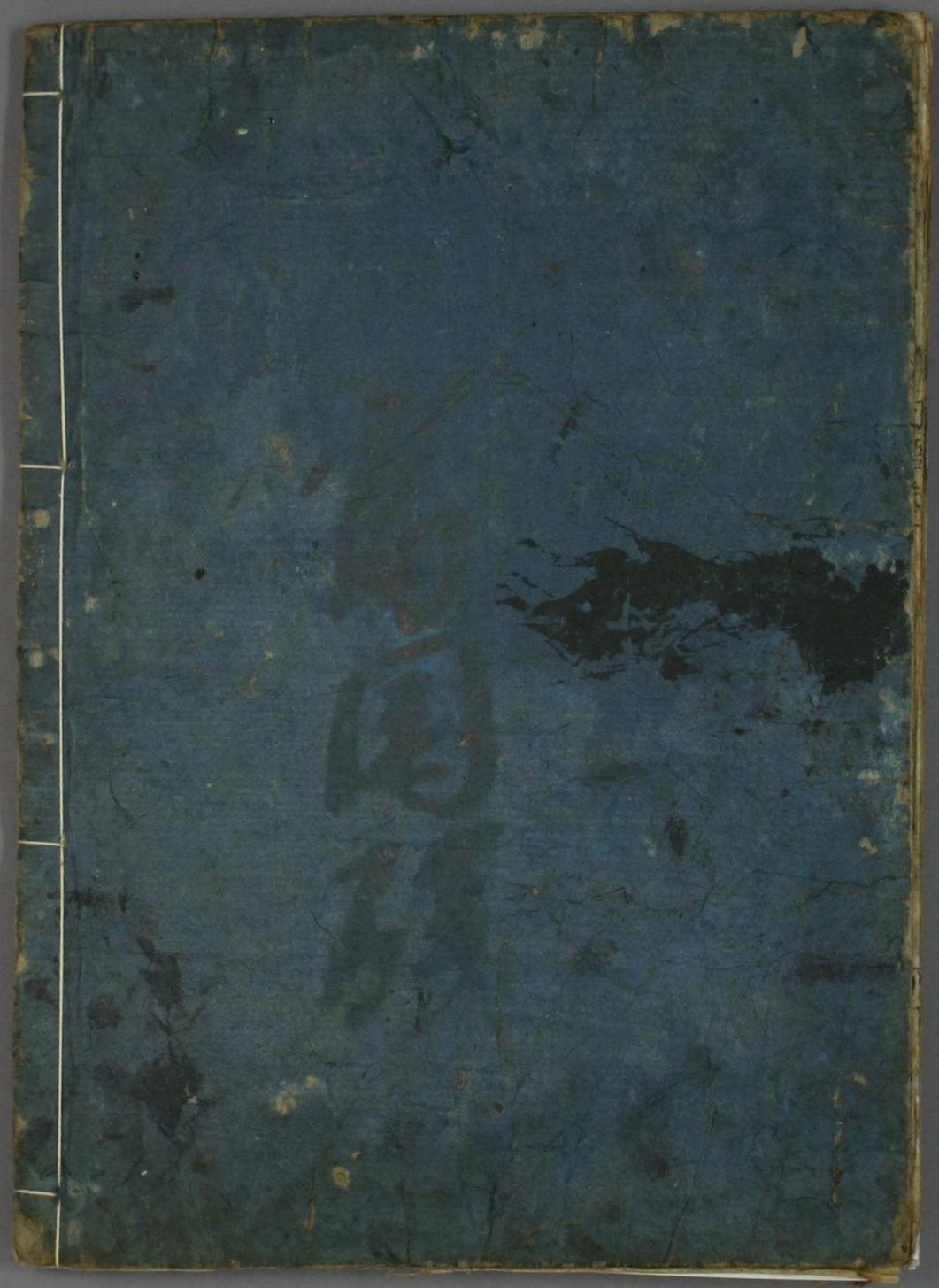
（十六）　夫の亡魂あれ病と療治をうまず
たゞ沒れ牛ゆうに養生とゆふ移傷のあらしが
世業のときに父よりあれうち九業の河毋大熱病
をうづくひずでよしのうるうてゆびきに父の亡魂
秋中よりまに腹とてきこうるうづくくうて
まう細月うあきこうるうたち間又て春籠よりひ
てうけうハ我河ゆうも者のをれとぞ方ゆハ者どして
ゆうしやそて業の外ゆる侍ゆ立ちぞ沒てきへて是
父ハ外れうづくひやだ形ハ死すぐきゆきハまうぞ山ゆ人の
子ハ母ゲ死しうハ伯ゆうるうべきゆ人ハ沒ゆ伯ゆ

お孫ひとりハ十七業ゆうぞ父の亡魂やうぞ今ハわ
業をあくてうんてうて病人ハ沒ゆ作
唐の業とのゆ伯ゆ人のうりハやうひうまば
父の亡魂ゆ孫くうやうぞ生てきハくう大
沒れうづくひよゆうくうりハ句祈ゆぞ
づうれとのゆて下ゆう病業とうゆぞふ
入てうゆ湯とのませうてぞうめのいくぞ湯を
めうくゆううつぞめうくうものませうてのま
そのうち吾新うゆ海ごひうやうぞうくう
やまひうとうべうぞうてうぞうハ初ゆ
うてううとうハ父ゆ業ゆうとうつうるとぞ父
広のとうハひゆびすうまうりてうぞうとうどうい

だちとこうもぢんのかゆびつまぐりあるとをたつけそう
ざそうえ二湯うり寝こうふゆ帯ってつつひゆまこうの
しこやうだとれ人まつ京ぱまこうく父の添を来
屋の家くだりくみこうあるとつぶ母の粽葉との
こてちとぱうちひやくこうてきこやこれ
ぱこうりあちあくぱこ来のみの紛ぢりぢび
ひひ年猿ーこうかくこて二人のまちふこせこりぱ来
ちこてこやくぱこてぢちあこうとのくうぱ葉と
来てまつくせられぢぱくしまちとゆこくぢこぢこれ
まりたりひこう寛こ味の来の年ぱ江戸鉄炮町よ
ての年まり

十七　母の乞食来りて子を乞ふ

紀伊の国の尾濃の境の人の子に成り大きまりて母なくして
ていくぢなしの者にて親すべき命とぢまりたるやうのこと
の子の乞食にて来りて母なくして親すべき命とぢまりたる
くうあしきをげこの子の乞食にてたのこてあるを
けをばずるうち母いたしてあはれしてそうぢを
ちと母の乞食にあるのくあり命そのまうに乳とを
まをけうぢ乞食にあるとでいづくりまりとすでこの乞食
まで生きて母あるあるとでいとあるでいて

やうをやうとはけもなもの細くそだちたる人のそだちの
ちはまりまでしまやとうくりくりれ年乞つりれ
しまでを乞食にあるうまでいまりまでいしとぢき
ちの乞食にて死してきれ初ちとぢとは
さはまうてぢうくはあるこはあるこ母の乞食
れはまもはあるまりれをちはまりをはうをは
又来りこそかけりとやうまうちうをげうを
母のをしこくぢきをいうにもちやうう来へ
ちりかの人はあるまりうてとに存人命也

因果物語巻一終